

第3節 まとめ

1 覆土中に多量の礫の投入のある住居址について

今回発見された第1号および第3号住居址の覆土中には、非常に多量の礫が存在したが、これについて若干考えを巡らしてみたい。

礫群は住居覆土のほとんどを覆い、特に第3号住居址にあってはほぼ全面にわたって礫が詰まっているという状態であった。この礫群は、住居使用時になんらかの形で生活に使っていたものでも、また住居構築に利用していたものでもなく、さらに住居廃絶後に自然の営力によって流入したものでも恐らくないであろう。即ち人為の産物であり、住居廃絶時またはその後に投入された礫と考えざるをえない。

近年、松本市内の発掘調査で奈良・平安時代の竪穴住居址について同様の事例がいくつか目につくようになったので、簡単な集成を行って、この礫群の類型とその性格を見ることとする。第3表がその集成である⁽¹⁾。ここでは報告で住居内に「礫群の投入がある」「集石がある」とされたものを扱ったが、規模の著しく小さいものや、単にカマドの構築材が住居内に崩れ込んでいるだけと見られる様なものは除外した。

第3表 竪穴住居址内の礫群一覧

遺跡名	住居名	住居の規模 (m)	時期	集 石 の 状 態					類 型	文獻	
				位 置	層 位	範囲・疎密	礫径	礫の数			
島立条里的遺構	1	3.8×3.5	X I	中央部	上層～床	径約1m	疎	20～80	10数個	B b III	14
"	3	3.6×3.8	I X	中央部一帯	上層～床、大 礫ほど多い	約2m角	疎	10～60	80数個	B b III	14
"	6	4.4×5.1	X～XI	中央部や西	中層～床	1.8×1.5m	密	10～20	60数個	B b I	14
"	8	2.9×2.6	X I	中央から南半分	中層、遺 物を伴う	約1.5m径	やや密	10～20	80数個	B a I	14
"	11	3.5×3.4	X I	カマド前から南半分	上～中層	1.2×2.2m	密	20～60	80数個	B b III	14
"	12	5.2×5.1	IV	ほぼ全面	中層、上層 と床は疎	5×4.6m	密	10～20	大量	A a I	14
北栗	20	—×5.4	XII-XIII	カマド前から東半部	上層から床面	1.9×1.0m	やや密	20～50	50数個	B b II	11
"	23	4.0×4.3	X	中央部	上～中層	2.7m径	疎	30～50	30数個	B b II	11
"	30	3.5×3.4	IX	中央北寄り	中層	3.5m径	疎	20～50	30数個	B a II	11
南栗	4	6.0×6.0	X	カマド前一帯	中層	2.4×1.0m	疎	20～50	30数個	B a II	9
くまのかわ	1	3.7×3.8	X	中央から東寄り一帯	中層	1.5×2.7m	疎	20～50	50数個	B a II	5
北方	18	3.9×4.8	X	①西半部、②南 東部の2か所	下層、床より 2～5cm上	①1.2×2.0m ②1.2m径	疎 やや密	10～40 10～50	40数個 30数個	B a II B a II	13
"	21	6.1×7.0	X	①中央から南、②カ マド前の2か所	中～下層	①3.3×2.1m ②3.6×1.8m	やや密 疎	10～80 10～40	多量 80数個	B b III B b II	13
高松	1	5.4×5.8	XII-XIII	中央からカマド全面	中層	3.8×4.4m	密	5～40	多量	B a II	今回
"	3	6.0×7.1	XIII～	ほぼ全面	上～中層	5.6×6.0m	密	5～20	大量	A b I	今回

礫群の状態を第3表の項目別で観察すると以下のような姿が浮かび上がる。

住居址内での平面的な位置

大別して住居址内のほぼ全面に広がるものと、部分的なものの2者がある。特に後者は中央部一帯にあるものが多く、東西や南北、あるいはカマド側へ寄っている例もあるが、極端に壁際とか隅のことではない。このことは、部分的な礫群が基本的に埋没や埋め戻しと同列に近い存在であることを示唆すると考える。前者をA型、後者をB型と仮称する。

層位・深さ

ほぼ一定の層位・深さに存在するものと、上下の広がりの大きいものがある。上下の広がりが大きいものは、その全体に層的厚みがあるのではなくて、たいていは礫群の中心にむかって深くなっている。前者をa型、後者をb型と仮称する。

礫の大きさ

どの礫群にも径が10~20cmの比較的小さな礫は共通して含まれるが、大きさの上限ではかなり違ひが目立ってくる。ここに着目すると、礫径が10~20cmの比較的小さなもののみで構成される礫群、大きな礫の上限が50cm位までのもの、それを越えるもの、の3類型が指摘でき、それぞれI・II・III型と仮称する。

礫の分布範囲・密度と礫の数

第3表の『礫の数』の項目は10個単位で礫の概数を数えたもので、100個を越えるものを『多量』、それと同じ位の密度で全面に礫が広がっているものを『大量』と表記してある。礫の範囲と密度・礫の数は相関関係にあり、ここでは礫群のなかに狭い範囲に密集して礫があるものと、礫の数に比して広く、密度が『疎』となっているものがあることがわかる。

第3表中の礫群の類型は上記の分類を組み合わせ、例えばB b III型というように示す。

次にこの礫群の形成の原因をいくつか推定・列挙し、上記の実像と照らし合わせて、無理があるものから消去を試みたい。

A：人為的に形成された可能性

- ①当該竪穴を廃棄し新たに竪穴を掘る際に地山から掘り出された大小の礫を投棄した（礫捨て場）。
- ②廃棄した竪穴に、カマドその他の施設・用具の材料として礫を溜めた（礫溜め）、またはそれらに利用・加工したあとの残り・残欠の礫を投棄した。
- ③住居を廃棄・埋没させる際に何らかの精神的な理由で礫を投入した。

B：意図的ではない形成の可能性

- ①住居の構築材として用いてあったものが残った。
- ②住居内の施設（カマド等）の構築材として用いられていたものが崩れて残った。

C：自然の営力により形成された可能性

①豊穴の自然堆積時に洪水等で運ばれてきた。

②豊穴の周囲上部包含層が砂礫層でそこにあった礫が自然に堆積した。

まずCだが、洪水等による形成の可能性については、ふるい分けの悪い砂礫や砂利を伴わない点から否定できる。また上部包含層の礫の可能性についても、礫の周囲に砂礫や砂利を伴うはずであるから、同様に否定される。次にBだが、住居内の施設の構築材として用いたものとすれば、部分的な礫群はもう少し壁際とか隅に集中しているものがあつてもよさそうで、その点から疑問視される。住居自体の構築材に用いたものなら、いずれの礫群も住居のかなり高い部分で使われていたと考えざるをえず、しかも、礫の大きさのバラツキが著しい礫群（II・III型）については問題が残るであろう。Aについては否定する材料は少ないが、他の豊穴を掘る際の礫捨て場とするとその周辺の砂礫層にはとうてい含まれないような大礫をもつ例（II・III型）が問題となり、逆に加工用の礫溜めだと礫の大きさにバラツキの少ない例（I型）が支障となる。しかしここでは礫群形成の原因として最も可能性の高いものとしてAを考えておきたい。

2 出土土器について

最初に断っておきたいが、土器観察表の「器形」欄に示した器種の細かい分類は、〔松本市教委1988『島立条里的遺構』〕⁽²⁾に準拠したものなので詳細はそちらを参考にしていただきたい。ただしこの分類は、今回調査の第1号・第3号住居址出土土器群より古い様相をもつものための分類だったので、以下で触れる2軒の住居址の土器の実情には合っていない部分が多くある⁽³⁾。それについては類似の資料の今少しの増加を待って、別の機会に改めたい。

(1) 第1号住居址出土土器

食膳具が中心で、器種組成は、大きくわけて高台を持たず底面に糸切り痕を残す壺と、高台をもつ壺により構成され、若干の皿が伴う。焼物の種別では土師器と灰釉陶器の2種があり、壺は土師器のみ、皿は灰釉陶器のみ、壺（碗）は灰釉陶器と土師器で作られ、焼物の種別と器種の間に対応関係があることがわかる。

細かく見ると、各器種のなかでさらに2種類の寸法に分かれているものがある。壺は、口径10cm・器高2.5cm未満の小さいものと、口径が13cmくらいの大きなものの2種類。壺（碗）は、口径10cm・器高4cm未満の小さいものと、口径13cm・器高6cm以上の大しくゆったりと深めのものの2種類が見られる。これをまとめると、第23図の上段に示す組み合わせが本址出土の食膳具の代表的なものといえる。11世紀代の資料と言えよう。

成形・調整等の製作技法については、土師器の壺類が例外なく内面にミガキと黒色処理が施されているのにたいし、壺類は内外面にロクロナデの痕跡を明瞭に残してそれ以上の調整が行われていない点が特徴的である。小形の壺のなかにはミガキ・黒色処理を外面にまで及ぼしたもの（10・13）も見られる。また壺のミガキには暗文を意図したと考えられるもの（9・13）がある。